

九条の会 成城・祖師谷地区への草稿

・日本の近代とは、明治維新から太平洋戦争敗戦の昭和二十年までを言う。
日本の近代は「富国強兵」「国民皆兵」を国の進むべき道として出発した。

・富国強兵は他国への侵略に繋がった。日本は武力を以て海を越え隣国へ侵入し、
広大な土地や地下資源などを領有しようとした。

・国民皆兵は総ての日本国民に兵役に服する義務があるとする法規。
自分の命が自分のもので無かった時代である。

・侵略

明治の精神 色川大吉著

太平洋戦争までの日本は二〇〇〇年間も、異民族から殺戮的な侵略を受けた事は一度もなかった。

日清戦争、日露戦争、日中戦争、太平洋戦争という大戦争を除いて日本の
対外出兵は十一回。対外出兵、対外戦争、合わせて十五回。

十一回の出兵は、朝鮮と中国に対する一貫した戦争である。この對朝鮮、
對中国問題を抜きにしての議論は歴史を捏造することになる。

- ① 明治 7 年 台湾出兵
- ② 明治 8 年 朝鮮 江華島攻撃
- ③ 明治 15 年 壬午軍乱による 朝鮮出兵
- ④ 明治 17 年 甲申事変による 朝鮮出兵
- ⑤ 明治 27、8 年 日清戦争
- ⑥ 明治 33 年 北清事変で北京に大軍派兵
- ⑦ 明治 37、8 年 日露戦争
- ⑧ 大正 3 年 青島攻撃、南洋諸島占領
- ⑨ 大正 7 年 シベリア干涉戦争
- ⑩ 昭和 2、3 年 山東出兵第一次
- ⑪ 山東出兵第二次
- ⑫ 昭和 6 年 満州事変
- ⑬ 昭和 6 年 上海事変
- ⑭ 昭和 12 年 日中全面戦争
- ⑮ 昭和 16 年 太平洋戦争：初めて本土沖縄が戦場となった。

日本は太平洋戦争で三百余万人死んだ。しかし中国は抗日戦で二千万人

の生命を失った。

・満州事変以後「十五年戦争」の後段階の

昭和十六年十二月八日 米英に戦争布告。太平洋戦争三年八か月間。

昭和十七年六月五日 開戦後半年後より日本は敗勢に向かう。

ミッドウェイ海戦に敗北。

昭和十八年四月 ソロモン群島上空で山本五十六連合艦隊司令官戦死。

昭和十八年五月、アッツ島日本兵二五〇〇人玉砕。

昭和十八年九月 同盟国イタリア降伏。

昭和十八年十月二一日 戦況悪化。文系学生の徴兵猶予廃止。明治神宮外苑で

出陣学徒壮行会。東条英機訓話。海ゆかば」の大合唱。

海ゆかば水漬く屍 山ゆかば草むす屍

大君の辺にこそ死なぬ 顧みはせじ

昭和十九年七月 サイパン喪失。グアム・テナンのマリアナ諸島陥落。

サイパンはB29の基地となり十一月下旬より日本本土空襲始まる。

・米國の対日焦土作戦 油脂焼夷弾、黄燐焼夷弾・無差別絨毯爆撃。

・戦時下の日々

自分の命が自分のもので無かった時代、青年達は自ら選ぶ余地のない「死」に直面し、死の意味を問い続け、答えを求め続けていた。

・銃後の窮乏：大石弘子日録

戦況悪化と共に銃後の生活は窮乏して行った。青壮年らはみな戦争に行き、残った僅かな人手も軍需工場に取られ、どの店も休業する様になった。物資欠乏が次第に深刻になり、店で売る物は殆どなくなった。食料、衣料も統制され、配給切符で僅かなものを買った。

燃料がなく、我家では机も冷蔵庫も、父が集めた絵はがきのアルバムや父の形見の琵琶まで燃料にした。食料がなく、原っぱの雑草を探して食べた。

・空襲の記録 大石日録及び戦後補録

・十一月十九日 B29 八〇機 中島飛行場。

十一月二四日 南太平洋方面より敵数梯団来襲 B29 八〇機。

補：米側発表八八機 約三時間空爆。

十一月二五日 警報発令。

十一月二六日、警報発令。
十一月二七日 四八機空襲。

十一月二九日 夜半〓三〇日午前二時にかけて、最初の夜間焼夷爆弾空襲。

B29 二〇機、神田、芝、麻布、日本橋大火災発生。神田橋周辺は焼野原。

・十一月三日 B29 七〇機空襲。中島飛行場、吉祥寺、保谷、田無、小金井、練馬、杉並を爆撃。

十二月一〇日 夜間焼夷弾空襲二機

十二月一日 夜間二機来襲。未明二機来襲。

十二月二日 夜間二度警報。

十二月三日 今朝も空襲。

十二月四日 未明空襲 偵察と空襲 それぞれ一機。

十二月五日 未明五機来襲。

十二月二〇日 未明一機。

十二月二一日 夜間一機。

十二月二二日 未明一機。

十二月二五日 午後二機。

十二月二七日 大空襲 B29 五〇機来襲 中島飛行場、中野、杉並、王子、板橋、練馬、葛飾被害。

十二月二八、九、三〇、三一日 いずれも少数機空襲。

・二十年一月九日 午後二時頃空襲 B29 一八機数編隊 麴町、杉並、練馬、中島飛行機場 日本軍活発に反撃して空中戦あり。

一月一〇日から一一日 未明、午後、夜、空襲あり。

一月十二日 未明、午後空襲。

一月十九日 午後空襲。

一月二二日 夕 空襲。

一月二三日 未明 空襲。

一月二六日 夜空襲 連日少数敵機東京に来襲。

・空襲体験 大石日録より

昭和二〇年一月二七日 土曜日午後二時過ぎ。空襲時、階段室などへ逃げよとの指示が有った。私はビルの地下室へ避難。凄い衝撃と音響が続き、エレベーターを伝って水が溢れ出して来た。地下室も危険と思い一階へ出る。一階の女事務員は、爆破のガラス破片がショールから髪、首筋まで一杯刺ってキラキラ光っているが、本人は気が付かない様子で、夢中で何かしゃべり乍ら行ってしまった。正面入り口の大シャッターを降ろした外は火の海で、炎の反射が、シャッターの隙間から、明々と筋になって差し込んでいた。ビル

の三階と四階の角に当たる、齒科医院に火が付いた。ビルの周囲は直撃弾で瞬時に飛び散り、激しい炎の海となった。

悪夢のような時間が過ぎて外に出る。数寄屋橋寄りのビルの非常階段の外は大きい血だまり。目前の数寄屋橋公園地下には人が埋まっているという。ビルの隣りのレストランは直撃を受けて、建物消滅。家族全員死亡との事。有楽町駅も直撃され、死骸をシャベルでトラックに掬い上げて搬出したと聞く。死者多数。マツダビルの対角線の角に有った安田銀行の辺りは爆破されて何もなし。日劇のシャッターは内部に曲がり込んでいる。朝日新聞社の窓は総て外へ向かって噴出した形に壊れている。一海軍将校がホースを持ってびしょ濡れになって、マツダビルの角で消火して下さったとの事。そのホースと思われるものが大蛇のように道にのたうっていた。

泰明小学校にも直撃。泰明小学校の向かいのビルの内部が燃えて、どす黒い炎を噴出するので、噴出した直後の炎の隙を待って走り抜ける。ビル全体が溶鉱炉の様にゴウゴウと鳴り響いていた。銀座まで見通しの焼野原。人々の後について水道橋まで歩き、省線電車に乗る。

・補：未明、二回来襲。B29 七二機、中島飛行場を狙ったが強風と雲層の為目標を捕捉できず反転して麴町区の有楽町、丸の内、京橋、銀座、浅草他下谷、深川、葛飾、向島、足立区などを雲上より爆撃。死者五三九名。

・補：悲惨を極めたのは有楽町、銀座界限への猛爆撃である。数編隊からなるB29 は、中島飛行機工場爆撃不能の為、反転して市街地爆撃に替えた。一八二トンの爆弾、焼夷弾の混投により銀座ビル街は蜂の巣の様になった。大型の直撃弾を受けた有楽町駅は、ホームまで埋め尽くした死体で足の踏み場もない状態に一変した。有楽町駅並びその付近の死者は百名を越え、爆風によって手足がもぎれ飛び、肉片が散乱する修羅場となった。死体はトラック二台にかき集めて日比谷公園内の屍体仮収容所に運んだ。死体運搬だけでも二時間かかった。

・補：朝日新聞 東京被爆記「S45-1-27

並木通り：爆弾は並木通りの和装履物店 与板屋」と 亀岡醫院」の間にも落ちた。：隣の亀岡さんが：みると防空壕の端にモンペの胴体が落ちている。足袋がぬげて素足が白い：向うの酒屋の前に、奥さんの首がある。：亀岡醫院の坊ちゃんの手が、五十歳ほど離れた 銀座湯」の煙突に引っかかっていた。

二月七日 朝出社したらすぐ警戒警報。

二月一〇日 空襲九十機

マニラ市街戦。ベルリン市街戦。

二月一四日 午後一機来襲。

二月一五日 午後一機来襲。

二月一六日 艦載機の波状攻撃。終日連続攻撃。

ラジオ報道：述べ一〇〇〇機以上来襲。敵有力機動部隊近海に出現。明日も警戒を要す。艦上機多数。死者五五六名。

二月は連日連続攻撃が続いた。艦載機の波状攻撃である。頭上に彼我の大乱戦が行われた。砲声や、空を切るキューンという金属性の高い音、屋根や塀に当たる落下音。

二月一七日 昨朝七時過ぎから始まった敵艦載機波状攻撃は今日まで続き、午後やや静かになった。近海に三六隻の艦隊が遊弋中との事。昨日も今日も頭上に彼我の大乱戦を見る。

来襲機述べ一〇〇〇機。

二月一九日 市街地無差別爆撃一〇〇機。

葛飾、深川、渋谷、江戸川、王子区空襲。

敵小型戦載機の波状攻撃。殷々たる砲声。頭上で炸裂する砲弾。

二月二一日 大本営発表。硫黄島敵軍上陸。

二月二三日 神風特攻隊、硫黄島に出撃。

朝日新聞：皇土空の包囲企つ 一億一兵に徹し反撃へ。

二月二四日 浅草、下谷空襲。死傷者二〇七名。

二月二五日 午前艦載機六〇〇機、午後B29 一三〇機来襲。

雲上より東京市街地を 中野、淀橋を含む）本格的無差別爆撃。

日本機一機も飛ばず。九時半警報。

硫黄島激闘。マニラ死闘。

二月二六日 朝日新聞：敵の本土上陸作戦企図必至」。

三月四日 B29 来襲。数梯団に分れ多数機。

三月五日 少数機二回来襲。

三月六日 朝日新聞記事。

をみなわれら断じて戦う。皇土護りぬくのみ。驚かじ敵の侵入上陸」。

三月八日 B29 一五〇機。都内各所爆撃。

朝日新聞 本土決戦に成算あり」我に数倍の兵力、鉄量、敵上陸せば撃砕一挙に戦勢を転換せん」。比島の時と同様の記事。

三月九日 深夜、B29 集団来襲。

ラジオ情報 B29 数十機が関東地区一帯の上空に居る」。

・昭和二〇年三月一〇日快晴。陸軍記念日

・東京大空襲

三月十日土曜日午前零時過ぎより。

翌朝、数寄屋橋あたりにも塵灰と異臭が立ち込める。

軍公務者以外に汽車乗車券不買となる。

・補：焼失区域：深川、本所、城東、浅草、日本橋の各大部。下谷、神田、麴町、本郷、荒川、向島の各半部。芝、牛込、小石川、京橋、麻布、品川、蒲田、王子の各一部。東京三五区中二九区。

B29 投下爆弾百キロ級六個、油脂焼夷弾四五キロ級八五四五個。二・八キロ級一八三〇五個。エレクトロン一・七キロ級七四五個。
一夜にして推定十万人焼死。

米軍発表来襲機 第一次 三三四機

第二次 二七一機

・以後全国に亘り一〇〇回以上の無差別爆撃が始まる。

三月一五日 朝、警報発令で昼近く出社。

三月一八日 焼跡から吹き付ける風はまだ屍臭が甚だしい。

三月一九日 名古屋に来襲。四国及び阪神地方に波状攻撃。

三月二〇日 名古屋、四国、阪神地方波状攻撃。 警報二回。

三月二一日

・補：硫黄島玉砕発表。栗林司令官電文をアウンサーが涙にぬれた声で伝えた。

三月二六日 名古屋市街地無差別爆撃 B29 一三〇機 一時間半にわたり空襲。琉

球に艦砲射撃。

三月二八日 慶良間列島に敵上陸との新聞報道。

四月一日 B29 一機 淀橋、豊島へ。

四月二日 B29 五〇機。中島飛行機工場爆撃。時限爆弾混投。

・四月四日 小磯内閣辞職。

関東地区大空襲 新宿と思われる辺り真っ赤な空。

・補：午前一時から三時間。B29 一六〇機。立川飛行場、中島工場爆撃。東京
一一九三死傷。

四月五日 モロトフが日中条約破約の申し入れ。

四月七日 関西へ戦爆連合での大規模空襲。

・補：午前九時二〇分新島に B29 一〇〇機、九時五〇分 B29 中島飛行場爆撃。
この日、日本機五三一機が迎撃して空中戦。

米側資料) B29 三機墜落、六九機被害

・四月八日 新内閣発表。特攻隊攻撃しきり。軍艦マーチ流れる。

・補：琉球戦の敵艦船三四隻撃沈という嘘の報道をする。

四月一二日 午前九時二十分 B29 一〇七機、P51 九三機、中島飛行機工場爆撃。

四月一三日補：午後十一時から十四日午前二時二十二分まで

B29 一〇六機、夜間低空焼夷弾攻撃。皇居西北部地区中心に空襲。

死者二四五九名。豊島、本郷、牛込、淀橋、板橋、神田、四谷、

小石川、杉並、向島。

・補：新聞報道：帝都を無差別爆撃一七〇機来襲。四一機撃墜。宮城の一部火災。明治神宮本殿拝殿焼失。

四月一四日 空襲二十三時から翌朝二時五十四分まで。

・補：名古屋大空襲名古屋市内半分以上失った。

四月一五日 空襲午前十時三分から十六日午前一時十五分まで。

約三時間 B29 一〇〇機来襲。死者八四一人。蒲田、麻布、大森、目黒、品川、芝、荏原、世田谷。目黒大石牧師館焼失。

四月一八日 空襲 一機、府中。

四月一九日 空襲午前十時前後、B29 少数と P51 一〇機、立川、荏原、目黒、渋谷、杉並、爆撃。

四月二四日 空襲八時二五分から九時三〇分まで。

四月三〇日 空襲八時三五分から九時四五分まで。

空襲十時から十一時二一分まで。

五月一日 空襲二三時四三分〜〇時三三分。

五月八日 空襲十一時四五分〜十二時二七分。P51 一〇〇機。

B29 十数機。

・補：同盟国ナチスドイツ降伏。

五月十四日

・補：名古屋大空襲。焼夷弾二千五百トン投下され、名古屋城焼失。さらに十七日三千六百トン投下され、名古屋市内は半分以上失われた。早乙女勝元

五月二三日 未明、B29 一〇機、麻布爆撃。風速一五 m。原宿焼ける。

五月二四日

・補：未明、B29 二五〇機、米側発表五二五機）都内西部方面に二時間に亘る無差別爆撃。投下爆弾は三六〇〇トンに達し、大森、品川、目黒、渋谷、

世田谷、杉並の各区に大火災発生死者七六二名。

更に決定的大打撃は、翌二五日深夜、一息入れる間もなく B29 二五〇機（米側四七〇機）が、まだ焼夷弾の洗礼を受けていない東京の残存地区に向けて、油脂、黄燐、エレクトロンの各種高性能焼夷弾三二〇〇トンを一挙に投下した。三月十日の下町大空襲の実に二倍に近い焼夷弾の量。被害は山の手方面を中心に全都に及んだ。

・補：民防空は最近における徹底かつ大規模なる空襲に、其の戦闘意識を殆ど喪失しをり、ために初期防火全く行われず、火災は全被弾地域に及ぶ」

五月二五日麻布三田空襲 五月二十四、五日 大石弘子日記より

空襲警報が出たと思う間もなく爆撃が始った。三田の慶応義塾の方向に火が上がる。寮は危険と思ひ古川沿いの空地へ行く。次々と焼夷弾、黄燐焼夷弾が落ち始め、周囲は火の海になった。川向うの家を焼く炎が竜巻となり、火の粉と共に川を越えてくる。済生会病院の患者の担架が担ぎ出され、傍らの空地に並ぶ。其の毛布を炎の熱風が吹き上げる。低空飛行で頭上に迫る敵機は、操縦士の姿が見えるほど近い。地上や空を焼く火で飛行機の中まで明るかった。砂利を落すような、金属板を叩く様な凄まじい音がして爆弾が落ちて来た。いくら走っても敵機の大きな影の下から逃げられなかった。黄燐焼夷弾の低い炎が地面を覆い、私達はその中を右往左往した。芝増上寺の五重塔が眼前で炎に包まれて焼け崩れていった。夜が明けても、上空はまだ煙に覆われて、雨天のように暗い。交通機関運行不能。徒歩にて出社。街の状況は無残の限り。

五月二八日 三田の寮から中野の自宅までの道筋は殆ど焼け野が原となり、焼けた土の火照りが顔にむつと来る。道路は熱に膨れ上がり割けている。電柱が倒れ電線が絡み合っている。僅か残ったビルの建物も、中は焼けてガラスドウである。目標とするものが無く、どこを歩いているのか分らない。赤坂連隊跡か、焼けつくした瓦礫の中に一人の将校が馬に乗った儘、呆然と佇んでいた。

五月二九日

・補：午前八時 一二分 B29 五〇〇機、P51 一〇〇機の戦爆連合が横浜爆撃。その一部が東京へ来襲。

六月一〇日

・補：午前七時四分、B29 三九機、立川陸軍航空本部と板橋区内工場を爆撃。

六月一日

・補：午前 一時三〇分 B29 に誘導された P51 約六〇機が北多摩昭和村を空襲。

六月二六日 日に二度も三度もの敵機来襲にて疲れ果てている。

七月四日

・補： 一二時 一二分、一三時過ぎまで空襲。

七月五日

・補： 一二時 二二分 小型機約七〇機飛来。

七月六日

・補： 一二時 八分、B29 少数に誘導された P51 一〇〇機が関東地方に侵入。

東京、八王子、南多摩を爆撃。

七月七日

補：B29 少数機に誘導されたP51機約一〇〇〇機が、関東地区全体を襲撃。その一部が八王子、立川を銃爆撃。

七月八日 一二時一〇分。B29とP51 亦型グラマン)約二五〇機が浅川、立川駅(関東各地)を爆撃。

七月一〇日

補：午前六時二〇分〜午後三時半まで艦上機約二五〇機飛来。立川と成増飛行場を爆撃。

補：関東地区空襲第一波。五時一五分〜七時二五分。一五〇機。

第二波。八時二六分〜九時四五分。小型機五〇機。

第三波。一〇時一〇分〜一三時二三分。小型機沢山。

第四波。一四時一〇分〜一七時一二分。総数三三〇機。

報道：空襲警報解除されたるも敵機動部隊は本土に近き東方海上に遊弋中なるを以て防空態勢発令。

七月一二日

補：B29 蒲田区爆撃。

七月一三日 京浜地区空襲、被害甚大の様様。

七月一五日

補：東北軍管区内大空襲。室蘭に艦砲射撃。

七月一六日

補：空襲。二三時二〇分〜二時二〇分。

七月一七日

補：空襲。五時一八分〜七時四二分。艦上機による。

補：日立、水戸へ艦砲射撃。二三時四〇分〜〇時二〇分。

七月一八日

補：空襲。一二時三〇分〜一六時四〇分。戦爆二五〇機の大編隊が横須賀に来襲。

七月一九日

補：B29 一機は通勤時の八時二五分に東京駅東側に投弾。一発で六三名死傷。

補：正午、B29 一機、江戸川爆撃。

補：二十日にかけて空襲。二二時五五分〜一時五四分。

七月二五日

補：空襲。一二時〇八分〜〇時五分。B29 五〇機、川崎爆撃。

七月二七日

・補：空襲。午前五時半、四〇機が新島に来襲。
七月二十八日

・補：一二時半頃 P51 約四〇機、東久留米、調布飛田給、三鷹を爆撃。
七月三〇日

・補：艦上機来襲三回。

第一波 午後二時四五分西多摩、西秋留に来襲。

第二、三波 一〇時一〇分。

第四、五波 一時〜一四時一二分。静岡爆撃。

第六波 一五時一〇分〜一七時五分。主力に依る空襲。

空襲 二三時二分〜〇時三〇分。清水へ艦砲射撃。

八月一日

・補：深夜、B29 六〇〇機、鶴見、川崎、長岡、水戸、富山空襲。その一部一六九機が八王子、立川に焼夷弾投下。この爆撃で八王子市は全滅。

・補：B29 三一〇機が関東、信越、北陸の各地爆撃。うち七〇機が八王子を集中的に爆撃した。八王子は一夜にして壊滅した。

八月三日

・補：P51 一二〇機が関東各地を空襲。内少数機が午前一二時前後、杉並、滝野川、王子を銃爆撃。

八月五日

・補：正午頃 P51 七機が八王子に来襲。

八月八日

・補：B29 約六〇機が東京西部と武蔵野爆撃。

八月一〇日

・補：B29 一〇〇機、P51 一五〇機が赤羽、板橋、王子、足立を空襲。

八月一三日 午前五時二〇分より艦上機による空襲。終日サイレンやブザーが鳴る。

・補：午前八時〜一二時まで艦上機五〇機が焼跡の壕舎を銃撃。

・補：艦載機約六〇機が大森、蒲田、品川爆撃。

八月一五日

補：午前一時半、B29 八機飛来。青梅に焼夷弾投下。この空襲が東京に対する最後の空襲。

天皇陛下の「終戦の詔勅」を聞く。

・戦争指導者らは本土上陸決戦を昭和二十年九月とみていた。

・昭和十九年六月法規定 十五歳から六十歳まで根こそぎ義勇軍。

私達は知らぬ間に国民義勇軍にされていた。

一般国民 男子十五歳〜六十歳、
女子十七歳〜四十五歳。
国民義勇軍として、戦場に出て闘う義務を有する。

・日本軍の戦法
特攻と斬込突撃でしかできなかった戦争。
陸軍海上特攻隊：特攻機で足りず、海上特攻として十六歳から十八歳くらいの少年を、爆弾と共にベニヤボートに乗せて標的に当たらせた。特攻機やこの海上特攻艇には、高度の操縦技術修練は要らぬ、爆薬と人を一体化した肉弾戦法であった。

・日本軍の特攻攻撃は比島戦から始まる。
昭和二十年一月二十七日の訓示。「ルソン戦史」振武集団小林兵団長
挺身斬込は：寡を以て衆を圧倒することが：戦勝の要道なり。
挺身敵陣に斬り込み、爆薬を抱きて敵戦車に肉薄体当たり（攻撃）を敢行し：一人たりとも遊兵なからしむべし：

・沖縄特攻隊による死者四千五百人。
・特攻発案者の言 海軍軍令部次長大西瀧治郎。
「二千万人の日本人を殺す覚悟でこれを特攻として使えば、決して負けない。日本国民がなお二千万人戦死するほどの一戦を試みよう」

・戦死の美化 言葉に因る思想化
国の為に命を捧げるのは男子の本懐、家の誉れであるという思想の刷り込み。
玉碎「散華」 若き軍神「南溟散華」 悠久の大義に生きる」という言葉による思想操作をおこなった。

・戦争の真実は伝えられなかった。政府は国民に戦争の真実を告げず、虚言をもって誘導した。
一般国民は国家の嘘を戦争に負けてから知った。
戦争中の一般日本人は戦争に知らなかった。負ける事のあることを現実として考えなかった。

・広島と長崎に特殊爆弾が落ちたという短い情報。

・未来の平和
日本は自らの侵略の事実を心に刻み。戦争をしないことを誓わなければ平和

は得られない。

・死んでいった若者達

生きる事を許されなかった若者たちは、自分の死後の世界に希望を繋ぎ、残る者の幸せを、自らの死の代償として、ようやく死んだ。

学問を続け、仕事を続け、家族らと団欒し、子供らを愛し、絵を描き、音楽を聴き、夏の海で泳ぎたいと、それらの夢をすべて諦めて死んだ。

・敗戦

非戦こそ戦後日本の出発点 桜井哲夫著

戦後、あの「敗戦」から人々が再出発したときの理念や誓いが、結晶化したものが「第九条」の不戦条項である。

私達は何処から出発したかという事は、私達がこれからどこへ行くべきかを教えて呉れる。

夥しい屍の上に築かれた憲法九条。私達は其処から出発した。

私達は戦争をしないと世界に向けて言い続ける。

戦争の悲しみや苦しみが忘れられた時、又、戦争は繰り返される。

・何故戦争したのか。

日本に敵が攻め寄せて来たのか。

日本は貧しかったから他国から奪おうとして戦ったのか。

アジアの民の救済のために正義の戦をしたのか。

・若者達は何のために死んだのか。

死への道を、父親、息子達はどのように納得して死んで行ったか。

・その死を以て私達に贈ってくれたものは何か。

・次なる戦争がそこまで来ている。

・戦争の悲しみを忘れないでいよう。

二〇一六年六月

大石草稿

一九四五年(昭和二十年)の四月には絶望的な戦争を続ける日本があった。B29の猛襲下に交通は分断され、主要都市は次々と壊滅し、生命は一片の木の葉よりもはかないものであった。原子爆弾はサイパンで既に用意されていた。その頃、ワンマン吉田茂は憲兵隊の囚人であり(補：田代登美男氏と同じ代々木の陸軍刑務所・吉田松陰が繋がれた処：に囚われていた)

この時に誰が今日を予想し得たであろうか？

この十年！飢餓を出発点として赤旗とインフレの波の中から生れ出た現実の日本を凝視するためにこの読本を編集した。昭和メモ」読本・現代史」に続く第三弾である。

金森徳次郎　：昭和二十一年の六月になつて私は新憲法草案を担つて会議で説明する役割に廻つた。

亀井勝一郎　：それほどユニークで名状し難い民族変貌期に直面したのだ。戦争の最中には、私にはこうしたことを言うと言われるが、私は戦争中日本の敗戦が想像できなかった。敗戦し占領されるということが、どういうことなのか、どうしてものみこめなかつた。一体敗戦とは何か。私は敗戦まもなくかいたが、占領直後の、比較的というよりは意外なほどの「平穩」にまづ驚いた。切腹した幾人かの右翼がいたが、「戦陣訓」を実行すべき筈の將軍たちは捕えられ、「鬼畜米英」と叫んでいた吾らも、ケロリとしてその米英を迎えたのである。それは一種の思い出ではないか。當時私はそう思った。つまり明治開国以来、「西洋」に対し抱きつづけてきた劣等感、「近代ヨーロッパ」なるものへの無条件降伏の「思い出」なのではないか。或はその痛烈な「再版」と言つていいかもしれない。

金子 甚六　：新型爆弾の攻撃を蒙り広島が爆破、倒壊、炎上して瞬時に壊滅したのは八月六日である。続いて長崎も亦被爆し、全市は眼を蔽う惨虐の様相を留め一瞬灰燼と帰した。さらに九日、ソ連は日本に宣戦を布告して大挙満州になだれこみ、：

：九州一円に展開した第五航空艦隊は九月中旬と推定される敵の本土上陸作戦を控えて応戦配備怠りなく、特攻十波(一波千機)の実施計画に基づいて営々と戦力の増強に努め、既に三千五百の特攻機に加えて予備機千五百、総勢五千を擁して全軍の戦意は天に押し、まさに一触即発の概に充ち満ちていた。